

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	大分県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	南海部郡本匠村立本匠中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	0	3	10
生徒数	18	15	19	0	52	

研究の概要

1. 研究主題

基礎・基本の確実な定着を図る指導方法の工夫

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<p>1年次にあたる本年度は、主として教科指導では、1学年・数学、2学年・国語でのTT学習の導入と重点指導の研究(習熟度別課題プリントの実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2学年・国語 学年全体に文法のみならずが見られる。また、表現力(発表)が低い学年であることから。 ・1学年・数学 生徒の理解度に非常に差がある。特に、基礎である計算力に顕著に差が見られ小学校低学年レベル程度の生徒が2割を占める現状であることから。 特設時間の活用として ・全学年対象 — 基礎学力の根底となる読み・書き・計算の習得の徹底を図る。 ・国 語 科 — 漢字テストの実施 ・数 学 科 — 100マス×2の計算の実施
--

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 「基礎・基本の確実な定着を図る指導方法の工夫」</p> <p>研究の見通し(仮説) 各教科において、授業形態の工夫をし、個々のつまずきに対応する継続的な指導を行っていけば、学習に対する意欲が向上し、学習の仕方が身につき、基礎・基本の定着が図れるであろう。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>1 基礎・基本のとらえ方の共通理解</p> <p>2 つまずき解消の手立て 教科指導でのTT学習の導入と重点指導の時間設定 習熟度別課題プリントの活用 特設時間の設置</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>成績のデータ化 ———— 個人カルテとして保存 補充指導の実施</p> <p>3 評価について 指導と評価の一体化</p> <p>4 家庭学習の実態把握と指導について</p>
	(a) さわやかタイムの開設 ・読書、計算、英語リスニング
	(b) いきいきタイムの開設 ・漢字テスト、100マス×2計算

平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

TT学習における成果

- ・授業中の個々の生徒の意欲化を図る点では、かなりの成果が得られた。
- ・個々の考え方やつまずきの把握というきめ細かな指導の実践という点では、その効果は大きかった。

重点指導

- ・1時間の授業の中に10分間の重点指導の時間を設け、前時の復習やつまずきの見られる単元について継続した指導を行ったところ、かなりの成果が上がった。
- ・習熟度別課題プリントを活用したが、生徒も意欲的に取り組み、かなりの効果が見られた。特に、国語の文法テストでは、回を重ねるごとに正答率が上がってきたが、しっかり身につくには未だ不十分であり、時間も必要と考える。

さわやかタイム

- ・始業前学習として、一日の学習の準備態勢を整える上での効果はあった。

いきいきタイム

- ・個人データを作成し、その変容と効果を探っていたが、大体において各学年ともある程度の成果が見られた。
- ・漢字テスト、100マス×2テストも、回を重ねるごとに時間短縮、あるいは高得点を上げる生徒が徐々に増えてきている。
- ・生活ノートの感想欄で、漢字の使用頻度が高くなってきた。

補充指導

- ・つまずきの見られる生徒、また、その日の授業内容、また、宿題等の未習の生徒に対して主に放課後実施したが、徐々にではあるがその効果は出てきている。

テスト後の誤答ノート提出や毎日の自主学習に対する取り組み、あるいは授業に対しての意欲・態度等、明らかに向上の兆しを見せてきている点、徐々にではあるが研究の成果が見え始めているものと推測する。

4月下旬に実施したCRTテストと翌2月初旬に実施する同テストとの比較考察をする。(2月のCRTテストの結果を分析し次年度の課題とする。)

2. 今後の課題

TT学習によるきめ細かな指導やつまずき克服のための重点指導を実践してきたが、成績中位から上位の生徒には、かなりの効果が得られた反面、成績下位の生徒の伸びが低く、成績の二極化となって表れた。この下位の生徒に対する指導が、今後この研究の大きな課題としてあげられる。次年度は、この一つの改善方法として習熟度別学習の導入(少人数学習等)の実施を考えている。

1時間の授業の中に10分間の重点指導時間を組み込んだことによる授業時間の短縮という負荷を補うために、次年度は、学習方法の工夫、及び教材研究の工夫を図る等の授業の効率化をめざしていかなければならない。

学習の基礎・基本の基となる読み・書き・計算の徹底を図るため、特設時間の確保をし徹底をめざしてきたが、授業や家庭学習等の意欲への波及効果はどれほどなのか。また、同じことの繰り返しは、飽きやマンネリ化に繋がりがねないと思われる。生徒がより意欲的に取り組める内容について、次年度の研究の中で今後考えていく必要がある。

評価については、実践と評価が一体となるようより効果的な方法を探っていかなければならないと考える。たとえば、授業後のアンケートや単元別テストの実施、指導法の工夫改善を図るための形成的評価についても、より有効なものを考えていく必要がある。

家庭での学習習慣の形成のための指導や支援について具体的に示し、家庭学習の充実を図っていくことが今後の課題である。充実した教育相談の活用という点についてもしっかり取り組んでいかなければならないと考える。

